

第 10 回 JAMS 総会のご案内

先号でもお伝えいたしましたとおり、第 10 回 JAMS 総会は立命館アジア太平洋大学（大分県別府市）で開催されます。幸いにも 4 つの自由報告をいただき、また、書評セッションも持つことになりました。以下にプログラムと各報告の要旨を掲載いたします。今回は書評セッションが設けられておりますため、参加される方はできるだけ対象著書にお目通しいただいた上でご参加いただければ幸いです。

まだ総会の参加申し込みをしていない方の当日の飛び入り参加も歓迎いたします。ただし、懇親会への参加も希望される場合は、早めに開催校幹事の石井までメールでお申し込みください。

なお、1 日目に予定されている会員総会では、来年度の運営スタッフの選出を含め、JAMS のこれまでの活動を振り返り、今後の活動のあり方を検討することになるかと思えます。ご都合で今回の総会には参加できないという方もいらっしゃると思いますが、会員総会ではなるべく多くの会員のご意見を参考にさせていただいた上で JAMS の活動方針を検討したいと思えますので、JAMS の活動や運営についてのご意見等をあらかじめ JAMS News 編集部あるいは各地区の担当者までメール等でお寄せくださいますようお願いいたします。

第 10 回 JAMS 総会プログラム

開催日：2002 年 2 月 9 日（土）、10 日（日）

会 場：立命館アジア太平洋大学（大分県別府市）

F 棟（教室棟）1 階 F107 教室

会場へのアクセスは次の URL をご参照ください。

http://www.apu.ac.jp/apu_jp/about/ab05_j.html

2月9日(土)

13:30 開会

13:40~15:20 第1報告セッション

13:40~14:30 報告1: “The Arabs in Peninsular Malaysia: A Visual Survey” (英語)

Omar Farouk Bajunid (Hiroshima City University)

14:30~15:20 報告2: 「半島マレーシアにおけるキリスト教とマレー(シア)語の関係
—— “禁止用語” に関する州法をめぐって(2)—— 」(日本語)

綱島(三宅)郁子(マラヤ大学言語学部博士課程)

15:20~15:40 Tea Break

15:40~16:40 書評セッション(日本語)

書評対象著書: 金子芳樹『マレーシアの政治とエスニシティ——華人政治
と国民統合——』晃洋書房、2001年。

書評者によるコメント: 篠崎香織(東京大学大学院)

著者によるコメント: 金子芳樹(獨協大学)

16:40~17:00 会員総会

17:00 閉会

19:00~ 懇親会

2月10日(日)

10:00~11:40 第2報告セッション

10:00~10:50 報告3: 「ブミプトラ政策再考」(日本語)

三木敏夫(札幌学院大学)

10:50~11:40 報告4: 「マレーシアにおける民族概念: サバ州の事例より」(日本語)

山本博之(東京大学)

11:40 閉会・解散

【報告要旨】

Omar Farouk Bajunid

“The Arabs in Peninsular Malaysia: A Visual Survey”

The Arabs represent an important strand of the ethnic mosaic that characterizes the Malay community in Peninsular Malaysia. However, there is only a dearth of documentation on the Arabs and not much is really understood about them. In a sense, like many other sub-ethnic communities which appear to have either assimilated into the Malay community or been summarily considered a contemporary non entity, the visual image of the Arabs in the Malay peninsula, is generally not clear. Who are the Arabs? How do they look like and how distinguishable are they pheno-typically and culturally from the ‘other’ Malays? Are they categorizable as a community? This paper is an attempt to answer some of the above questions by introducing visually the Arab community of the peninsula and its network through a slide presentation which will also be accompanied by a discussion of the ways in which the different facets of Arab and Malay identity in Malaysia have been continually negotiated and expressed.

綱島（三宅）郁子

「半島マレーシアにおけるキリスト教とマレー（シア）語の関係——“禁止用語”に関する州法をめぐって(2)——」

今回の報告は、第9回 JAMS 総会で発表した内容の補足およびその後進展した調査結果を予定している。

まず、現段階で入手済みの6州法と3州法案から該当部分を抜粋して作成した一覧表を概観し、問題点を探る。(去年紹介したものと一部重複する。)次に、1980年から始まる一連の州法・州法案通過の進行中、上記の一覧表に含まれていない国語語彙についても内務大臣よりキリスト教会に対して使用制約をかける通達が出された事実を述べ、関連を考察する。続いて、政府によるこれらの動きの背景となったキリスト教と国語をめぐる出来事を、英語2紙とマレー語2紙の報道から推察する。同時に、キリスト教のみならず、非イスラーム諸宗教の指導者達がこの問題に対してどのように反応し、政府と交渉を重ねたかを紹介する。最後に、今年8月に面会したマレー・ムスリムの研究者(比較宗教学専攻)の見解を説明することにより、この事例が、マレー人の根幹アイデンティティ(マレー語とイスラーム)に抵触する可能性を含みつつも、結果的に連邦憲法と矛盾するという現実を示唆して結びとする。

三木敏夫

「ブミプトラ政策再考」

この度発表された OPP3(2001年から2010年)では、OPP2(1991年から2000年)で棚上げされていたブミプトラの資本所有比率30%の同期間達成を明記した。OPP2の期間中、マレーシア政府はブミプトラへの富の再分配よりも成長を優先し、マレーシア経済を高度成長に導き、ASEANの優等生と言われる中進国までに押し上げ、「マレーシア国民」の創出に腐心してきた。

今回ブミプトラ政策の強化を打ち出した背景は、アンワール問題と総選挙(1999年11月実施)でのPASの大幅議席増によるマレー人社会の分裂を修復することを狙ったところにあり、変貌しつつあるマレーシア社会の中で、再度ブミプトラの求心力を高める唯一の政策であるブミプトラ政策に活路を求めたものと考えられる。また、マレー人と開発に取り残されがちなインド人との間の対立が散発的に発生しており、多民族国家におけるマレーシア国民創出の難しさをみせている。

このような状況下、2020年の先進国入りを目指すマレーシアは、政治・経済的にターニング・ポイントを迎えているように見える。ブミプトラ政策を再考することにより、マレーシアの先進国入りの課題を探ってみた。

山本博之

「マレーシアにおける民族概念：サバ州の事例より」

現代のマレーシア社会を理解するうえで欠かせないのが民族概念であり、そのさしあたりの出発点として「マレー人、華人、インド人の三大民族」という図式がある。ここで挙げられた「民族」は、どれも文化的な多様性を内包しており、言語・文化的集団としての民族と同一視することはできない。しかし、他方でこれらの「民族」が、少なくとも当事者にとって、言語・文化的集団として一定の意味を持っていることも否定できない。

これらの「民族」が歴史的に形成されたものであることはマレーシア研究において共通の認識になりつつある。しかし、これらの民族概念がマレーシア社会において具体的にどのように機能しているかについての研究は必ずしも十分になされていない。

本報告では、サバ(旧イギリス領北ボルネオ)を事例として、非植民地化の過程における政治指導者たちの思想と行動を追うことによって民族概念の形成過程を跡付け、それを通じてサバにおける民族概念の機能についても検討したい。このことはまた、マレーシア全体における民族概念とその機能についての検討にもつながるだろう。